

平成29年 6月 定例会

◆（淵上陽一君） 続いて、肥後六花の振興についてお尋ねいたします。

熊本地震から1年2カ月が過ぎました。甚大な被害からの復旧、復興が進められる中で、その象徴的存在として注目を集めていますのが熊本城であります。

今般の地震は、我が国最強の城とうたわれてきた熊本城にも深刻な被害をもたらし、その無残に傷ついた姿を目にするたびに、胸を突かれる思いがいたします。熊本城の完全復旧には、20年という時間と600億円を超える費用を要するとのことであり、その長い道のりを考えますと、心が重くなります。

しかし、一方では、熊本城修復を支援する復興城主制度が、熊本県民のみならず、国の内外から大きな反響を呼び、その寄附額は、受け付け開始から6カ月にして10億円を超えたとのこと、まことに心強く感じるところであります。

熊本城は、今被災を契機として、熊本復興のシンボルとしてだけではなく、築城以来の歴史や果たしてきた役割にも改めて光が当てられ、県民の一人として、まことにうれしく感じるところであります。

さて、本日お尋ねいたしますのは、熊本城とともに激動の時代を生き抜き、今に伝わる肥後六花についてであります。

肥後の国熊本は、古くから園芸が盛んな土地柄であります。その源は、今から300年前の江戸後期、熊本藩第6代藩主細川重賢公による薬草園の開設と武士のたしなみとしての園芸の奨励に始まります。

その後も、歴代藩主が保護奨励に努める中で、品種改良や育種を重ね、肥後独特の純粋種がつくり出され、現在、肥後六花の名前で知られているツバキ、シャクヤク、ハナショウブ、アサガオ、菊、サザンカの肥後の銘花が生まれたのを初め、梅、松、藤、蘭の盆栽、盆養にも、極めて格調の高い園芸が伝えられています。

その中でも、肥後六花は、我が国の園芸の中でも特別な存在として知られ、梅芯と呼ばれる花芯の優美さ、一重咲きの花形、花色の純粋さが共通する特徴とされています。

肥後六花は、その長い歴史の中で、西南の役の大火や太平洋戦争の空襲など、再三数多くの品種を失う危機に見舞われましたが、愛好家の方々の懸命の御努力により、今もその美しい花をめでることが出来ますのは、ありがたい限りでございます。

さて、こうして300年の長い歴史を生き抜いてきた肥後六花には、今また危機的な状況が訪れ、門外漢の私のところにまで直接、間接にSOSの声が届いております。

私は、この質問を準備する中で、肥後六花の愛好家の方々や肥後六花研究の第一人者である東海大学農学部の中田教授をお訪ねしてお話を伺いましたが、皆さんが口をそろえて言われたことは、愛好家の減少と高齢化が進む中で、いつまで守っていくことができるのかという不安でありました。

例えば、現在、最も活発に活動されている肥後つばき協会は、かつては500名を超える会員

がおられたものが、現在では正会員 49 名、特別会員 10 名の計 59 名、しかも、このうち熊本県在住の正会員は 35 名にすぎず、特別会員は、イタリア、ドイツ、フランス、ベルギー、イギリス、オーストラリア、韓国の外国人であります。

こうした状況が進行する中、約 120 種類ある協会認定の品種を、どこで、誰が栽培しているか、確認できないものが出始めているということでもあります。また、肥後ハナショウブや肥後シャクヤクのように、栽培者が数名の御高齢しかおられない花もあると伺い、私も危機感を強めている次第です。

私は、こうした危機的な状況が生まれた一番の原因は、多くの熊本県民が、いつの間にか肥後六花の存在に無関心になってしまったことにあるのではないかと推察しております。

熊本にとって、熊本城が武士の強健な身体を示す象徴とすれば、肥後六花は武士の心持ちや魂を示す象徴であり、どちらも末長く守り育てていってこそ、江戸時代以来綿々と続く肥後、そして熊本の歴史のバトンを受け取り、手渡すことになるものと考えています。

一方、熊本でこうした憂慮すべき状況が生まれているのと反対に、外国でブームを起こしている肥後六花があります。その代表が肥後ツバキであります。

ここに、それを示す本と講演録を持ってまいりましたが、御紹介いたします。(資料を示す)

もちろん、どちらも外国語で書かれておりますので、後ほど知事にはお目通しをいただければというふうに思います。

まず、この大きな本は、イタリア人の肥後ツバキ愛好家、フランコ・ギラルディ博士が自費出版された肥後ツバキ図鑑であります。

この図鑑は、博士が自分で撮影された 120 種類の肥後ツバキの写真と解説がイタリア語と英語で書かれており、国内外を合わせて、現在、最も新しい肥後ツバキの図鑑とのことです。

ミラノ郊外の町で薬局を経営する博士は、ヨーロッパで出会った肥後ツバキに一目ぼれして以来、何度も本場熊本を訪れ、肥後つばき協会の方々と親交を深める中で、ツバキを譲り受け、あるいは植木市で購入するなどして持ち帰り、今では自宅の庭に現存するほとんどの品種を育てておられるとのことです。

この図鑑は、肥後ツバキのみならず、熊本の自然、歴史、名所旧跡などについてもしっかりと書かれており、外国人観光客向けのガイドとしても大変有用な内容となっております。

博士は、この功績により、世界の園芸界で最も権威あるイギリス王室園芸協会の会員に推挙され、今や欧米のツバキ愛好家の間でも知らぬ者はいないほどの存在となっております。

もう一つ御紹介いたしますのは、同じく肥後ツバキを愛してやまないドイツ人医師、ゲオルク・ツィームス博士が、ことし2月、初めて熊本を訪れ、肥後つばき協会総会で行った挨拶です。

この中で博士は、肥後ツバキに寄せる熱い思いを述べた上で、肥後ツバキを初めとする肥後六花は、いずれユネスコ無形文化遺産に登録されるべき価値ある花だと話され、今後の肥後ツバキ文化の増進と保存のために、協会に多額の寄附をいただいたとのことです。

今後、八代港へのクルーズ船寄港の大幅増並びに国際航空線の増便等を通じて外国人観光客の来訪増加が予想される中、肥後六花や今欧米でブームになっている盆栽を初めとする

肥後の園芸を、熊本の魅力の一つのジャンルとして、外国からの訪問客にアピールするためのプレゼンテーションの方法を検討されてはいかがかと考えます。

以上の指摘を踏まえ、3点について知事にお尋ねいたします。

まず、熊本県の貴重な宝である肥後六花に対する知事の御認識をお聞かせください。

2点目は、肥後六花に対する県民の認知度向上の一助として、教育の場での活用を図られてはいかがでしょうか。

3点目は、肥後六花を国内外からの観光客誘致の一つのツールとしてアピールされてはいかがでしょうか。

以上、知事にお尋ねいたします。

〔知事蒲島郁夫君登壇〕

◎知事（蒲島郁夫君） まず、肥後六花に対する認識についてお答えします。

加藤、細川の歴史、文化の磨き上げや次世代への継承については、私のマニフェストや熊本復旧・復興4カ年戦略に掲げ、その取り組みを進めています。

肥後六花は、細川家の武士の美意識や精神性を色濃く反映したものであり、熊本の品格をあらわす貴重な本県の宝の一つです。私は、先人たちによって大切に守られてきたこの伝統文化のすばらしさを、県民の皆様に深く知っていただき、次の世代へ引き継いでいくことが大変重要だと考えております。

一方で、議員御紹介のとおり、肥後六花は、これまで愛好家による保存会の活動により守り継がれてきましたが、近年、会員の減少や高齢化により、次の世代への継承に支障を来すことが懸念されています。

そのため、まずは市町村や保存会の方々と意見交換を行い、実情を把握したいと思います。そして、この宝を守り、引き継いでいくために、必要な手だて、有効な方法について研究してまいります。

次に、教育の場における活用についてですが、本県の子供たちが、熊本の貴重な宝である肥後六花について学ぶことは、郷土を愛し、郷土に誇りを持つ意味においても、大変意義深いことです。

今後、教育委員会等と連携して、肥後六花に関する資料を新たに作成し、肥後六花の歴史や、そこに込められた高い精神性等の理解を深めていくなど、具体的な取り組みを進めてまいります。

最後に、観光客誘致のツールとしての活用についてお答えします。

現在、肥後六花のうち肥後ハナショウブが、県内では熊本市動植物園、八代市の松浜軒、また、東京都文京区の肥後細川庭園でも見ごろを迎えており、多くの来園客を楽しませています。

四季折々に咲く花々をめぐる気持ちは、万国共通のものです。肥後六花は、その容姿の美しさとともに、細川家の武士の美意識や精神性という、歴史に裏づけられたストーリーを持っています。外国人観光客に熊本をアピールする上で、熊本ならではの観光資源になり得るものと考えます。

これまでも県の情報サイトやパンフレットなどで紹介しておりますが、今後も、観光キャンペーンなどを活用し、優美で品格のある肥後六花の魅力を、国内外に広く発信してまいります。

〔淵上陽一君登壇〕

◆（淵上陽一君）ありがとうございます。

この2カ月、肥後六花の愛好家や研究者の方々にお会いするたびに、肥後六花の今後に対する心配と嘆き、そして、半ば諦めの声を数多く聞いてまいりましたが、ただいま知事の御答弁を伺って、本当に心強く感じました。愛好家、研究者の皆様にも、この質疑をぜひ御報告したいと思えます。

本件に関して、1点要望を申し上げます。

肥後六花の過去、現在、未来を考えると、最大の課題は、いかにして種を保存し、次の世代に引き継いでいくかということです。

花といいますと、役所では、それは個人の趣味の問題でしょうという答えが返ってきますが、肥後以来 300 年の熊本の伝統文化を受け継いでこられた個人の栽培家が、もうそろそろ無理かもしれないと、SOSを発しておられるのであります。何とか種がきちんと保存され、次の世代へ引き継いでいかれるよう、県の関係部においても御支援をいただくよう、要望いたします。